

異なる難易度の文法項目に対する処理指導の効果についての研究：
ロシア語を母語とする日本語学習者を対象に

GARMAEVA Olga

本研究では、ロシア語を母語とするゼロ初級の日本語学習者を対象にコミュニケーションを重視した日本語教育の中から、インプット中心活動である処理指導（Processing instruction；VanPatten 1996; 2004）を取り上げ、その効果を検証することを目的とした。これまで処理指導の効果を検証した先行研究を踏まえ、ロシア国内でゼロ初級学習者を対象にコミュニケーション重視の日本語講座を開設し、処理指導と産出指導の効果を比較して処理指導の効果を明らかにした。

日本語講座の授業では処理指導と産出指導のクラスに分け、それぞれの受講者に対象の文法項目を含む指導を行い、その学習成果を事前・直後・遅延の理解テスト・産出テストによって測定した。協力者は研究1で18名（処理指導グループ10名、産出指導グループ8名）、研究2で19名（処理指導グループ11名、産出指導グループ8名）であった。

対象の文法項目は、先行研究（Cheng 2004；Comer&DeBenedette 2011；中上 2012）で指摘された文法項目の難易度の観点から、助数詞（研究1）、動詞過去形（研究2）の2種類を選んだ。複数の対象文法項目に対する指導効果の比較することによって、対象項目の特性がそれぞれの指導の効果にどのような影響を与えるかについて明らかにした。日本語の講座はロシア国内で3ヶ月にわたり実施し、データ収集は研究1では第9週目、研究2では第14-16週目に行った。

研究1では5つの基本的な助数詞を対象に両指導を行った。結果、処理指導は学習者の理解面、産出面ともに効果があり、助数詞の意味と形式の関連付けを促進していた。まず理解面では指導前に比べ指導直後および2週間後の得点が高くなったが、産出指導との差はなかった。つまり、助数詞の理解に対し、処理指導の効果が認められたが、その効果は産出指導と同等であった。また、産出面でも、指導前に比べ指導直後・2週間後の得点が有意に高くなってはいたが、その効果はやはり産出指導との差はなかった。つまり、処理指導の効果は助数詞の産出に対しても認められたが、産出活動と同等であった。さらに、指導前には、母語と同様に「数詞+数えられている名詞」の数量表現で助数詞の脱落が見られたが、処理指導を受けた後では、両グループでその誤答は激減した。ただし、2週間後の遅延テストでは、産出指導では助数詞の脱落が再び増加したが、処理指導では2週間後も助数詞の脱落は増加することはなかった。つまり、処理指導により、助数詞を脱落させる誤ったストラテジーの使用が減少していた。

研究1ではさらに、対象の助数詞の正答率を分析した。結果、どちらの指導でも理解・産出が困難な項目があった。ただし、処理指導のみで見られた困難としては、「ほん／ぽん／ぼん」の音韻的な変化を伴う助数詞の産出が困難であった。

研究2では、動詞過去形の丁寧体と普通体に対し処理指導と産出指導を行った。その結果、理解テストでは、両指導グループとも指導により得点が有意に高くなっており、2週間後の得点は直後と有意な差がなかった。また、普通体は丁寧体より事前の点数が高かった。最後に、有意傾向ではあるが、全体的に処理指導の方が産出指導より効果があった。なお、理解面では、処理指導では丁寧体と普通体の得点に差はなかったが、産出指導では普通体の方が丁寧体より上回っていた。

産出面では直後テストにおいて、指導の効果に差が認められた。具体的には、処理指導では丁寧体で高い得点を示したが、産出指導では普通体で高い得点を示した。また、それぞれの指導グループを個別に分析してみると、処理指導では普通体より丁寧体の得点が有意に高かったが、産出指導では言語形式の差は見られなかった。言語形式の難易度による違いを見ると、理解面では、処理指導では、普通体が丁寧体より難しかったが、産出指導では差が見られなかった。産出面では、処理指導では直後テストでは丁寧体は容易であったが、普通体は直後、遅延テストともに難しかった。これに対し産出指導ではGIの-i動詞を除き、全ての丁寧体が容易であったが、普通体でも困難でなかった。

以上、研究1と研究2の結果を総合すると、コミュニケーションを重視した日本語教室で文法を教える方法として処理指導が有効であることが明らかになった。なお、指導の効果は、指導の対象となる言語形式に左右され、形式的に単純な項目では処理指導の効果が高い傾向があるが、複雑な形式を持つ項目では産出指導の効果の方が期待できることが明らかになった。